

Melléklet

A Nakamurával készített interjú adatai

Időtartam: 43:46.16

Gyűjtés helye: Jikaguchi Yama 4 – 1, Ichinosawa, Ōaza, Nangō, Hachinohe-shi, Aomori prefektúra, Japán

Népcsoport: japán

Dokumentumtípus: digitális hangfelvétel

Adatközlő: Nakamura Take

Kor: 92

Forrás: az Osaka Egyetemen a mentorommal kerestünk még élő, hagyományos japán sámánasszonyokat – nem feltétlenül itako-t – és a következő cikket találtuk: イタコ 訪日客の人気復活 <https://www.toonippo.co.jp/articles/-/1568071> 2023.12.13.

A cikk már nem érhető el online.

Média:

篠原 匡「死者の口寄せ」体験で出会った最後の盲目イタコ、中村タケの半生 <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/69519> 2024.12.12

我妻恵美子「御年 92 歳のイタコ、中村タケさんに口寄せをして頂きました」 <https://note.com/emikoagatsuma/n/n6aafab2bb498> 2024.12.12

松本美枝子「イタコに会いに カメラマンたちとゆく小さな旅」 <https://www.driveplaza.com/trip/michinohosomichi/ver212/03.html> 2024.12.12

篠原 匡「写真で語る「イタコのいる日常」(1) 中村タケ」 <https://shinichiro-kaneda.com/articles/64> 2024.12.12

八戸在住のフォトレッツさん、91 歳のイタコの撮影続ける 銀座で個展も <https://hachinohe.keizai.biz/headline/2079/> 2024.12.12

八戸在住のフォトレッツさん、91 歳のイタコ題材にした写真集 日常にも着目 <https://hachinohe.keizai.biz/headline/2087/> 2024.12.12

篠原 匡「死者の口寄せ」体験で出会った最後の盲目イタコ、中村タケの半生 <https://jbpress.ismedia.jp/articles/gallery/69519?photo=1> 2024.12.12

最後の盲目イタコ 思い寄せ 伝え続ける <https://www.yomiuri.co.jp/s/ims/itako/> 2024.12.12

イタコの日常に迫る フォトレッツさん写真展 / 八戸 <https://www.daily-tohoku.news/archives/222220> 2024.12.12

篠原 匡「消えゆく習俗-青森県の女性霊媒師「イタコ」から見る日本人の死生観」 <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g02228/> 2024.12.12

最高齢 93 歳の最後のイタコ・中村タケさん、元気矍鑠（げんきかくしゃく）に只今
巫業「口寄せ」降霊中 <https://ameblo.jp/sakura3939eh/entry-12862138613.html>
2024.12.12

Bintarou Turtle Company Yamaguchi 「イタコ最高位！中村タケさん 90 歳降霊全記
録！ ATL5th スピンオフ」 <https://www.youtube.com/watch?v=F6ItizErp1w> 2024.12.12

Kötetek, gyűjtemények:

Muriel, Jovliet ミュリエル ジョリヴェ: Nihon saigo no shāmantachi 日本最後のシャーマンたち
[Japán utolsó sámánai], Soshisha 草思社, Tōkyō, 2023. [Tottori Kinuko 鳥取絹子]

中村タケ『イタコ中村タケ』アド・ポポロ、2013 年

イタコの 61 の“唱えごと”を CD と DVD で後年に伝える

和多田アヤ：写真集『TALKING TO THE DEAD』、蛙企画、2023 年 9 月
https://rekishiplus.com/?pid=176876967&srsId=AfmBOooneqD_FyY2gitWSDPSvO3x1HvKFiHT5eg7ExeJ6almIcxJBUnL 2024.12.12

Tartalom:

1./ (2:57.86) Japán stílusú tatamis szoba. Idős itako sámánasszony válaszol az interjúztató kérdéseire. A kuchiyose-ről (az itako sámánlásról), istenek, holtak szellemeinek megidézéséről mesél.

2./ (7:30.28) Az interjúztató az itako tréningről kérdez. Az itako elmeséli mikor és hogyan kezdte a tanulást, a tanítványként töltött idejéről, Oshira istenről, a megtanulandó anyagról, és egyéb ellátandó feladatokról a mestere mellett.

3./ (22:32.29) A mindennapi életről, vendégek fogadásáról, a régi időkről, mindennapi betevő megkereséséről, koldus-életről, itako sámánénekekről mesél. Az interjúztató kérdéseire válaszol vendégek megjelenésének gyakoriságáról, kérésekről, megbízásokról.

4./ (33:18.27) Az Osorezan-matsuri-ről mesél.

5./ (38:32.87) Az interjúztató kérdésére válaszolva elmondja, hogy nem fogadott tanítványt. Mesél az itako énekgyűjteményt tartalmazó Braille-könyvről, amely az asztalán van.

Eredeti nyelvű átirat

2:57.86

B： 最初の口寄せの体験について教えてください。

N： 口寄せはまず、仏さんを、でも神さんでも、山の神様とか龍神様とか、氏神様とか、その人の信じている神様を、言って頼めば、まず呼べば降りてきて、その神さんの思ったことを伝えるとは思いますが

B： 最初口寄せをした時はどんな経験でした？

N： 昔のことですね。まず呼んでれば、お師匠さんに仏さんと呼ぶときはこう、亡くなった年と月と日にちをちゃんと聞いて呼び出せば、まず降りてくるんだよって教えられたんです。意味わかるかい。

B： はい、ありがとうございます。

N： はい、そうやって、まずそういうことでずっと暮らしてきました。

B： 師匠さんのことですが、師匠さんは結婚していましたか。

N： 結婚はした。子供もね、女の子3人産んで

B： じゃ、イタコは普通に家族いますか？

N： うん、家族はいても、お客さんくれば、仏さん呼びたい時は仏さんに願って、その仏さんが出て言ってくさるようにしたんです。神さんってば神さんも、それなりに降りてくるように願って、自分の心っていうか、自分の言わないところにその神さんでも仏さんでもまずいわせてくれたね。

7:30.28

B： 修行が何に成り立ちましたか？

N： 修行はやっぱり、私が弟子に入った時は、まず 13 だったかな 14 だったかな。その頃の8月から、お師匠さんのところに通いました。

B： そこに何をしましたか。

N： そこに、まず、お師匠さんに、教えてくださいでもいいか、親たちが決めて、教えても、教えてあげるっていうかが、私も学校の生徒たちと一緒に朝に師匠さんの所に来て、夕方に帰っていくようにして、通ったんです。

B： どうやって修行しましたか？

N： その修行には、「おしらいさま」に頼まれたが、「おしらいさん」が口開きするように使う、頼んで、拝んで「おしらいさま」の占いをみなさんに言って、届けるようにしなければならないのがイタコの役目だということでした。で、「おしらいさま」を先生に習って、次には口寄せを、神さんでも仏さんでも（呼べるようになった）。

10:28:48

10:40:83

そうやってお客さんおいでくださったら、お客さんが呼びたいっていうもの。氏神様でも、山の神様でも、八幡様でも、とにかく神様を呼ぶと言う時は、まずそれは、少し習ってやるのだったからね、ただ（無料？）はできないから、時間はかかったんですよ。

B： どのくらい時間がかかりましたか？

N： 何か月も。いろいろね。呪いとか、まずその神さんを呼ぶのとか、「おしらいさま」とか、仏さん呼ぶのとか、いろいろ、お客さんの注文を、自分が願って、降りてきて、占いしてくださるようにしなければなりません。

B： 中村さんの修行と師匠さんの修行には何か差がありましたか。

N： え？

B： 師匠さんの修行についてわかりますか？

N： 修行はまず口寄せしたらその仏さんの亡くなった月も月日も命日も、ちゃんと聞いて、呼び出すようにして、拝まねばならないんだよということで教えられました。

B： どうやって拝みますか？

N： それは習えばわかること。習ええば、教えるようがない。

B： じゃ、やっぱり言葉で教えるのは無理ですね。

N： うん、言葉使えません。そんなのやるとおもってかい？（笑）

B：（笑）いえ、ただ、質問だけです。

N： なかなかね、難しいんだよ。いろいろと。

14:35:19

15:12:69

N： で私は 14 の 8 月に教えてもらえることを親たちがちゃんと決めて、してもいいよって言うてくださったからね。8 月の 24 日で初めて行ったんです。なら、お客さんくれば、教えてもらえないからね、そっちが大事だから。その他に、お客さん来て拝んで、頼んでいきたいということになれば、その留守番を預かってお客さんいたら待ってもいい人は待たせて、だめな人は、お言葉を届けて、こういう人が来ても、待ってられないで帰ったけど、また来るそうですとか、まず色々ね、「きにうつ」しながら、暇な時に教えてもらったんです。頼まれていくこともだったり、しょっちゅうやったんですよ。うちでお祓いしてもらいたいっていえば、私は師匠さんところに行って、お客さん来たら、休んでもいい人は、入って、上がってもらって、休めない人の言葉、こういう人が来て、帰ってまた来るそうですっていうことを伝えながらね、暮らしたんですよ。

B： 修行した後にイタコになれない場合もありますか。

N： やっぱり、でもその気で頑張るから、時間は早い人もあれば、時間かかる人もあるけど、真剣にその気になれば何とかイタコという題字許すっていうか、習って大丈夫、読めるいうことができるようになると思います。私もなったから。

19:01:82

(それから中村さんと炬燵に移動して、面接を続けました。)

22:32.29

B： イタコとしての生活について教えてくださいませんか？

N： まず、別に、教わったのを忘れないようにちゃんと覚えることだね。それを毎日通ってね、私、教えてもらって。一番教えてくれれば、それを次の日まで復習しながらなるべく間違わないで、覚えて、朝にそこにまたお世話になりにいけば、入ったところで膝をこうして、その教えてもらったのをちゃんと読んで、忘れないで覚えてれば合格でよく覚えたなということで。次を教えてもらって、それを一ずつ思ってまた次の日にいって、それを読んで、間違っていなければ、合格で、また次教えてもらってね、というように一番づつ教えてもらいました。なんでもね、最初は、昔はエビスという歌を詠んで、みなさんにまず、なんでも米を白米くれた人は白米、袋に入れて帰る。まずなんでもね、その人のそこで食べれるものを、ご飯、食べてれば、その次に「手かして」そのご飯食べてお汁にいけば、ご飯もよかったら、食べてくださいいうように、あの、いわゆる乞食、（ってわかるかい）そういう形でね、色々暮らし頑張りながら、まず全部習ったわけです。

B： イタコを始めた時何か難しいことがありましたか。

N： いえ、別に難しいとは思わなかった。

N： 昔は今の様に裕福でなかったからね、ご飯食べるのも自分で歩いてもらって食べたり色々あって暮らしたそうです。今の様に私たち八十も超えているからね、昔だから。で、そのおらのお師匠さんもさ、百姓家さ生まれたからね、食べ物にはそんな困んなかったと思うけど、でもまずそういうふうに、みなさんの、なんて言うんですか、あれを与えてもらえながら色々習ったそうです。一日には、たった一番ね、教えの毎日ね、一番づつ十四番あれば十四日、師匠さんところに行って教えてもらって、それを忘れないようにちゃんと心得て、また次の日は昨日教えてもらったのをちゃんとよんで、大丈夫だと信じてくれれば、次を教えてもらって。昔はやっぱり、今の時代と違って色々食べる物も、やっぱり、大変だったそうです。だから、まず朝にいて、最初はエビスを一番教えてもらって、それが14番だからって、それ終わって次は口寄せする時呼んで神さんを寄せるのを神寄せ、それも14番。今度地獄探して、それは仏さんもね呼んだら降りてくるように、前もって明日から口寄せ出す「調の渦に」「ちょうのうず」、それもちょうと呼んだら口さ乗ってくるように呼んでね。それをちゃんとやってお客さん来るのを待って、頼まれたのを拝んで暮らすのがイタコなんだよね。

B： お客さんがいなかった時もありましたか？

N： やっぱりそれは、365 日来るとは決まっていなかったからね。そっちの都合で「？」と思って「でも」、あの、都合によって「？」でなかったとか「？」も「来なかった」人が「これだって」喜ぶ「人もいだった」わけね。そういうふうにして、仏さんも、でな、お客さんも色々で応えました。

B： お客さんはいなかった時はどうしました？

N： ないときは別にどうしようもないから、自分のしたいことをして暮らすのね。

B： 現在約何人来るのでしょうか？

N： あの、決まってははいないんだよ。でも、まず、長年「こやってる」からね、あの、来るときは5-6年も来てくださるし、来ないときは二人ぐらいが「なんぼうで」一日を終わることもあるし。お客さんだから、私で決められない。来てくだされば感謝して、拝むのが願いですね。

B： 昔と比べたらお客さんはもっと少ないですか。

N： そうだね、昔よりは、やっぱり少なかったでしょうね。

33:18.27

B： （中村さんは）恐山祭りにもいらっしゃったんですね。

N： 恐山にもずっと「32 歳から」72 歳まで行ったね。

B： 最後の時イタコは何人いらっしやったんですか。

N： あの頃はまあ、何でも」]津軽の方のイタコさんたちも 3-4 人、こっちの南部のイタコさんとも 3-4 人がそこにいたでしょう。8 人が、最後は 8 人は 9 人に「ひったった」。前には 30 何年も小屋っこを立てたんだ「むいめいね?」。テントもや、そうやって、そこに朝から夕方までお客さん来てくださっても、来ないでも、その仕事でいってからね。一日その小屋っこに暮らして、そこで昼ご飯食べて、朝のご飯は泊まったところで、夕方は泊ったところで、昼だけそのテントの小屋っこで食べてね。きてくだされば、あの、拝んだんですよ。

B： 昔はお客さんはがどのような依頼で訪ねてきましたか？

N： どのようって別に、聞いてみたいって思う人たちは来て、自分のこの人って呼ぼうところの向い、向いていうかまず、ほら、ここにいればそっちの方さ、ガラッと並んでね、あの、夕方には「けんか?け」。誰かが先に自分の「とこさ」来ようと思ったで、だって、ほら、朝間から順番待って「こやった」のに「あんださん」が「さっき来てれ」先に行くということは私たちにしてだめだ、許されないから。順序守ってちょうだいってね。けんか「せんのういっき」いつもそれなんかまずい時によって。

B： 現在と昔を比べたら依頼は違いますか？

N： 聞きたくていく人は同じ、今も昔も。仏さんを何人だ何人呼びたいとだいたい決まっているでしょう。

B： お客さんが健康相談のために来ることもありましたか？

N： そういうこともあった、あるよ、今でもある。昔だけではない今でも。どうしても聞いてみたいって言う人たちは今でも毎日おいでになってる。

38:32.87

B： 弟子を取りましたか？

N： や、弟子は、習いたって言う人来なかった。

B： そうですか、時代が変わったんですね

N： 今イタコにならなくても、何とか食べて生きる時代になったんだもんね。

(炬燵の上に点字本が置いてありました)

B： 「点字本」もまだなかったんですね。

N: 昔はね、なかった。あの本は私が大阪の大学の先生のいらい中山さんという人が、一生の、あれだから、こういう本作りたいなら注文できるということだね。その大阪の大学のいらい中山先生が申し込んで「けで」、イタコの本を作ってもらって。その前は何も本とかそういうのはないから。習えば必ず頭まさいれないと、色々だからねおしらせさま「あやんのも」色々「あんだす」。口寄せのも、神様も仏さまもいろんなの呼ぶ人もいるからね。そういうのを全部「あざまさん」おいで呼ぶ、歌ってというか降りてくる方の力をもらえるの必ず呼んで、降りてもらうのだからね。そう、イタコも簡単ではない。

41:48:63

Rōmaji átirat

2:57.86

B: Saisho no kuchiyose no taiken ni tsuite oshiete kudasamasu deshō ka.

N: Kuchiyose wa mazu, hotoke-san o, demo kami-san demo, yama no kamisama toka ryūjin-sama toka, ujigamisama toka, sono hito no shinjiteiru kamisama o, itte tanomeba, mazu yobeba oritekite, sono kami-san no omotta koto o tsutaeru to wa omoimasuga

B: Saisho kuchiyose o shita toki wa donna keiken deshita?

N: Mukashi no koto desu ne. Mazu yondereba, oshishō-san ni hotoke-san o yobu toki wa kō, nakunatta toshi to tsuki to hinichi o chanto kiite yobidaseba, mazu orite kurundayotte oshieraretandesu. Imi wakarū kai.

B: Hai, arigatōgozaimasu.

N: Hai, sō yatte, mazu sō iu koto de zutto kura shitekimashita.

B: Shishō-san no koto desuga, shishō-san wa kekkon shiteimashita ka.

N: Kekkō wa shita. Kodomo mo ne, onnanoko sannin unde

B: Ja, itako wa futsū ni kazoku imasu ka?

N: Un, kazoku wa itemo, okyakusan kureba, hotoke-san yobitai toki wa hotoke-san ni negatte, sono hotoke-san ga deteitte kudasaru yō ni shitandesu. Kami-san tteba kami-san mo, sorenari ni oritekuru yō ni negatte, jibun no kokoro tte iu ka, jibun no iwanai tokoro ni sono Kami-san demo hotoke-san demo mazu iwasete kureta ne.

7: 30. 28

B: Shugyō ga nani ni naritachimashita ka?

N: Shugyō wa yappari, watashi ga deshi ni haitta toki wa, mazu jūsan datta ka na jūyon datta ka na. Sono koro no hachi gatsu kara, o-shishō-san no tokoro ni kayoimashita.

B: Soko ni nani o shimashita ka.

N: Soko ni, mazu, o-shishō-san ni, oshiete kudasatte mo ī ka, oya-tachi ga kimete, oshiete mo, oshieteagerutte iu ka ga, watashi mo gakkō no seito-tachi to issho ni asa ni shishō-san no tokoro ni kite, yūgata ni kaetteiku yō ni shite, kayottandesu.

B: Dōyatte shugyō shimashita ka?

N: Sono shugyō ni wa, o-shirai-sama ni tanomareta ga, oshirai-san ga kuchibiraki suru yō ni tsukau, tanonde, ogande oshirai-sama no uranai o mina-san ni itte, todokeru yō ni shinakereba naranai no ga itako no yakume da to iu koto deshita. De, oshirai-sama o sensei ni naratte, tsugini wa kuchiyose o kami-san demo hotoke-san demo [yoberu yō ni natta]

「…」

N: Sō yatte okyakusan oide kudasattara, okyakusan ga yobitai-tte iu mono. Ujikamisama demo, yama no kamisama demo, Yahata-sama demo, tonikaku kamisama o yobu to iu toki wa, mazu sore wa, sukoshi naratte yaru nodattakara ne, tada (muryō?) wa dekinai kara, jikan wa kakatta ndesu yo.

B: Dono kurai jikan ga kakarimashita ka?

N: Nankagetsu mo. Iroiro ne. Majinai toka, mazu sono kami-san o yobu no toka, oshirai-sama toka, hotoke-san yobu no toka, iroiro, okyakusan no chūmon o, jibun ga negatte, orite kite, uranai shite kudasaru yō ni shinakereba naranai desu.

B: Nakamura-san no shugyō to shishō-san no shugyō ni wa nanika sa ga arimashita ka.

N: E?

B: Shishō-san no shugyō ni tsuite wakarimasu ka?

N: Shugyō wa mazu kuchiyose shitara sono hotoke-san no nakunatta tsuki mo tsukihi mo meinichi mo, chanto kiite, yobidasu yō ni shite, ogamaneba naranaindayo to iu koto de oshieraremashita.

B: Dō yatte ogamimasu ka?

N: Sore wa naraeba waku koto. Narae eba, oshieru yō ga nai.

B: Ja, yappari kotoba de oshieru no wa muridesu ne.

N: Un, kotoba tsukaemasen. Sonna no yaru to omotte kai?

B: Ie, tada, shitsumon dake desu.

N: Nakanaka ne, muzukashīndayo. Iroiro to.

「…」

N: De watashi wa jūyon no hachi gatsu ni oshiete moraeru koto o oyatachi ga chanto kimete, shite mo ī yo tte itte kudasattakara ne. Hachi gatsu no nijūyon nichī de hajimete ittandesu. Nara, okyakusan kureba, oshiete moraenai kara ne, sotchi ga daiji dakara. Sono hoka ni, okyakusan kite ogande, tanonde ikitai to iu koto ni nareba, sono rusuban o azukatte okyakusan itara matte mo ī hito wa matasete, damena hito wa, okotoba o todokete, kō iu hito ga kite mo, matte irarenaide kaettakedo, mata kuru sōdesu toka, mazu iroiro ne, [ki ni utsu] shinagara, himana toki ni oshiete morattandesu. Tanomarete iku koto modattari, shotchū yattandesuyo. Uchi de oharai shite moraitaitte ieba, watashi wa shishō-san toko ni itte, okyakusan kitara, yasunde mo ī hito wa, haitte, agatte moratte, yasumenai hito no kotoba, kō iu hito ga kite, kaette mata kuru sōdesu tte iu koto o tsutaenagara ne, kurashitandesu yo.

B: Shugyō shita ato ni itako ni narenai baai mo arimasu ka.

N: Yappari, demo sonoke de ganbaru kara, jikan wa hayai hito mo areba, jikan kakaru hito mo arukedo, shinken ni sono ki ni nareba nantoka itako to iu daiji yurusutte iu ka, naratte daijōbu, yomeru iu koto ga dekiru yō ni naru to omoimasu. Watashi mo nattakara.

22: 32. 29

B: Itako to shite no seikatsu ni tsuite oshietekudasaimasu ka?

N: Mazu, betsu ni, osowatta no o wasurenai yō ni chanto oboeru kotoda ne. Sore o mainichi kayotte ne, watashi, oshiete moratte. Ichiban oshiete kurereba, sore o tsugi no hi made fukushū shinagara narubeku machigawanaide, oboete, asa ni soko ni mata osewani nari ni ikeba, haitta tokoro de hiza o kōshite, sono oshiete moratta no o chanto yonde, wasurenaide oboetereba gōkaku de yoku oboetana to iu koto de. Tsugi o oshiete moratte, sore o hitotsu zutsu omotte mata tsugi no hi ni itte, sore o yonde, machigatte nakereba, gōkaku de, mata tsugi oshiete moratte ne, to iu yō ni ichiban zutsu oshiete moraimashita. Nandemo ne, saisho wa, mukashi wa ebisu to iu uta o yonde, minasan ni mazu, nan demo kome o, shiro kome kureta hito wa shiro kome, fukuro ni irete kaeru. Mazu nan demo ne, sono hito no soko de tabereru mono o, gohan, tabetereba, sono tsugini [te ka shite] sono gohan tabete oshiru ni ikeba, gohan mo yokattara, tabete kudasai iu yō ni, ano, iwayuru kojiki, (tte waku kai) sō iu katachide ne, iroiro kurashi ganbarinagara, mazu zenbu naratta wake desu.

B: Itako o hajimeta toki nani ka muzukashī koto ga arimashita ka.

N: Ie, betsuni muzukashī to wa omowanakatta.

N: Mukashi wa ima no yō ni yūfuku de nakattakara ne, gohan taberu no mo jibun de aruite moratte tabetari iroiro atte kurashita sōdesu. Ima no yō ni watashitachi 80 mo koeteiru kara ne, mukashi dakara. De, sono ora no oshishō-san mo sa, hyakushōya sa umaretakara ne, tabemono ni wa sonna komannakatta to omou kedo, demo mazu sō iu fū ni, minasan no, nante iundesu ka, are o ataete moraenagara iroiro naratta sōdesu. Tsuitachi ni wa, tatta ichiban ne, oshie no mainichi ne, ichiban zutsu jūyonban areba jūyonban, shishō-san toko ni itte oshiete moratte, sore o wasurenai yō ni chanto kokoroete, mata tsugi no hi wa kinō oshiete moratta no

o chanto yonde, daijōbuda to shinjite kurereba, tsugi o oshiete moratte. Mukashi wa yappari, ima no jidai to chigatte iroiro taberu mono mo, yappari, taihen datta sōdesu. Dakara, mazu asa ni itte, saisho wa ebisu o ichiban oshiete moratte, sore ga jūyonban dakara tte, sore owatte tsugi wa kuchiyose suru toki yonde kami-san o yoseru no o kamiyose, sore mo jūyonban. Kondo jigoku sagashi tte, soreha hotoke-san mo ne yondara orite kuru yō ni, maemotte ashita kara kuchiyose dasu [chō no uzu ni], sore mo chanto yondara kuchi sa notte kuru yō ni yonde ne. Sore o chanto yatte okyakusan kuru no o matte, tanomareta no o ogande kurasu no ga itako nandayo ne.

B: Okyakusan ga inakatta toki mo arimashita ka?

N: Yappari sore wa, sanbyakurokujū nichī kuru to wa kimatteinai kara ne. Sotchi no tsugō de [? to omotte? demo], ano, tsugō ni yotte [?]de nakatta toka [?] mo [konakatta] hito ga [kore date] yorokobu [hito mo idatta] wake ne. Sō iu fū ni shite, hotoke-san mo, de na, okyakusan mo iroiode kotaemashita.

B: Okyakusan wa inakatta toki wa dō shimashita?

N: Nai toki wa betsuni dō shiyō mo naikara, jibun no shitai koto o shite kurasu no ne.

B: Genzai yaku nan nin kurudeshō ka?

N: Ano, kimatte wa naindayo. Demo, mazu, naganen [ko yatteru] kara ne, ano, kuru toki wa go-roku nen mo kite kudasarushi, konai toki wa futari gurai ga [nan bō de] ichinichi o owaru koto mo arushi. Okyakusan dakara, watashi de kimerarenai. Kite kudasareba kansha shite, ogamu no ga negaidesu ne.

B: Mukashi to kurabetara okyakusan wa motto sukunaidesu ka.

N: Sō da ne, mukashi yori wa, yappari sukunattadeshō ne.

33: 18. 27

B: (Nakamura-san wa) Osorezan matsuri ni mo irasshattandesu ne.

N: Osoreyama ni mo zutto sanjūni sai kara nanajūni sai made itta ne.

B: Saigo no toki itako wa nan nin irasshattandesu ka.

N: Ano goro wa mā, nani demo Tsugaru no hō no Itako-san-tachi mo san-yon nin, kotchi no Nanbu no itako-san domo san-yon nin ga soko ni ita deshō. Hachi nin ga, saigo wa hachi nin wa kyū nin ni [hittatta]. Mae ni wa sanjū nan nen mo koyakko o tatetanda [mui mei ne?]. Tendo mo ya, sō yatte, soko ni asa kara yūgata no jikan made okyakusan kite kudasatte mo, konaide mo, sono shigoto de ittekara ne. Ichi nichī sono koyakko ni kurashite, sokode hirugohan tabete, asa no gohan wa tomatta tokoro de, yūgata wa tomatta tokoro de, hiru dake sono tento no koyakko de tabete ne. Kite kudasareba, ano, ogandandesu yo.

B: Mukashi wa okyakusan wa ga dono yōna irai de tazunete kimashita ka?

N: Dono yō tte betsuni, kiite mitai tte omou hitotachi wa kite, jibun no kono hito tte yobō tokoro no mukai, mukai tte iu ka mazu, hora, koko ni ireba sotchī no hō-sa, garatto narande ne, ano, yūgata ni wa [kenka? ke]. Dareka ga saki ni jibun no toko sa koyō to omotta de, datte, hora, asama kara junban matte [koyatta] no ni [anda-san] ga [sakki kitere], saki ni iku to iu koto wa watashitachi ni shite dame da, yurusarenai kara. Junjo mamotte chōdai tte ne. Kenka [sen nō ikki] itsumo sore nanka mazui toki ni yotte.

B: Genzai to mukashi o kurabetara irai wa chigaimasu ka?

N: Kikitakute iku hito wa onaji, ima mo mukashi mo. Hotoke-san o nan nin da nan nin yobitai to daitai kimatteirudeshō.

B: Okyakusan ga kenkō sōdan no tame ni kuru koto mo arimashita ka?

N: Sō iu koto mo atta, aru yo, ima demo aru. Mukashi dakede wanai ima demo. Dōshitemo kiite mitai tte iu hitotachi wa ima demo mainichi oide ni natteru.

38: 32. 87

B: Deshi o torimashita ka?

N: Ya, deshi wa, naraitai tte iu hito konakatta.

B: Sōdesu ka, jidai ga kawattandesu ne.

N: Ima itako ni naranakute mo, nantoka tabete ikiru jidai ni nattandamon ne.

B: Tenjibon mo mada nakattandesu ne.

N: Mukashi wa ne, nakatta. Ano hon wa watashi ga Ōsaka no daigaku no sensei no irai Nakayama-san to iu hito ga, issō no, aredakara, kōiu hon tsukuritainara chūmon dekiru to iu kotode ne. Sono Ōsaka no daigaku no irai Nakayama sensei ga mōshikonde [ke de], itako no hon o tsukutte moratte. Sono mae wa nani mo hon toka sō iu no wa nai kara. Naraeba kanarazu atama sa irenai to ano, iroiro dakara ne oshirae-sama [ayanno] mo iroiro [andasu]. Kuchiyose no mo, kamisama mo hotoke-sama mo ironna no yobu hito mo iru kara ne. Sō iu no o zenbu [azamasan] oide yobu, uta tte iu ka oritekuru hō no chikara o moraeru no kanarazu yonde, orite morau no dakara ne. Sō, itako mo kantan de wa nai.

Magyar fordítás

B: Tudna mesélni az első kuchiyose tapasztalatáról?

N: A kuchiyose elsősorban arról szól, hogy az elhunyt lelkét (hotoke), vagy akár egy istenséget (kami) hívsz, ilyenek lehetnek a hegyek istene, a sárkányisten, a nemzetség istene (ujigami), vagy bármilyen más istenség, amelyben az illető hisz. Ha megkéred, lejön és elmondja, amit gondol [válaszol a kérdésedre], és a kuchiyose során ezt közvetítem.

B: Milyennek tapasztalta az első kuchiyose élményét?

N: A régi dolgokról van szó, ugye. A mesterem úgy tanította nekem, hogy ha először is [a vendégtől] megtudod, hogy az illető halálának évét, hónapját és napját, és ha [mindennek ismeretében] hívod, el fog jönni. Érted, amit mondok?

B: Igen, köszönöm.

N: Hár így éltem egész életemben.

B: A mesteréről szeretném kérdezni, ő megházasodott?

N: Megházasodott. Volt neki három gyereke is.

B: Tehát az itakóknak általában van családjuk?

N: Igen, még ha családod is van, ha jön egy megbízó, és az elhunyt szeretnének a lelkét szeretnéd megidézni, ha megkéred erre, akkor meg fog jelenni. Ha istenségről van szó, akkor is [ugyanaz érvényes]. Ha azt kérem, hogy az istenség jöjjön el, a maga módján, akkor a saját lelkem[ből], vagyis inkább [úgy fogalmaznék], hogy elmondhatja velem, amit saját magam nem mondok el [nem tudok elmondani].

7:30.28

B: Miből állt a [kiképzés]?

N: Tizenhárom vagy tizennégy éves lehettem, amikor tanítvány lettem. Augusztus volt, amikor elkezdtem járni a mesteremhez.

B: És mit csinált ott?

N: Először is a szüleim megkérdezték, hogy tudna-e engem tanítani, és ők döntöttek a dolgról. Ő beleegyezett, én pedig, amikor a többi diák reggel iskolába ment, én is velük mentem, csak én a mesteremhez, ahonnan aztán este mentem haza.

B: Hogyan folyt a kiképzés?

N: A tanuláskor Oshira-sama kér meg, Oshira-sama-n keresztül nyílunk meg, és kérlelve, imádkozva Oshira-sama jóslatát elmondani, átadni az embereknek. Erre képessé válni az itakó feladata. Így [először] Oshira-sama-t tanultam meg a tanítómtól, utána a kuchiyose-t, és megtanultam megidézni az istenek és az elhunytak szellemeit.

「...」

Így hát, amikor jön egy vendég, azért jön, mert valakit meg szeretne idézni. Ez lehet az udzsigami, a hegy istene, Hacsiman isten, mindenesetre, amikor istenséget szeretne hívni, először ebbe kell kicsit beletanulni. Csak úgy (ingyen? sok erőfeszítés nélkül?) nem lehet, időbe telt ugyanis [amíg sikerült].

B: Körülbelül mennyi időbe került?

N: Hónapokba. Sok minden volt. Varázsigének lehetne mondani, vagy inkább először is az istenséget, Oshira-sama-t vagy egy lelket idézünk meg, azt amit a vendég szeretne, és magunk kérjük meg, ő megjelenik, és [úgy kell mindezt csinálni,] hogy ő elmondja a jövődölését.

B: Volt valami különbség az Ön és a mestere képzése között?

N: Tessék?

B: Tud valamit a mestere képzéséről?

N: A [gyakorlaton] azt is megtanította [a mesterem], hogy amikor kuchiyose-t végzek, akkor először kérdezzem meg az elhunyt halálának hónapját és napját, és [megfelelő módon] kell magunkhoz hívni és fohászkodni hozzá.

B: Hogyan imádkozik?

N: Azt megtudod, ha megtanulod. Na nem tanulod meg, nem lehet megtanítani.

B: Tehát akkor szavakban nem lehet elmagyarázni.

N: Nem, szavakkal nem. Meg szeretnéd próbálni?

B: Nem, csak kérdeztem.

N: Tudod, ez nem könnyű. Sok szempontból.

.....

N: Azon az augusztuson, amikor 14 éves voltam, a szüleim úgy döntöttek, taníttatni fognak [a mesteremmel], a beleegyezése alapján. Augusztus 24-én mentem először. Eztán, amikor jöttek vendégek [a mesterhez], akkor nem volt ideje tanítani, mivel az ugye fontosabb. Ezen kívül, amikor jött vendég, azt is én intéztem [miközben a mester nem ért rá, mert egy másik vendéggel foglalkozott], és ha tudott várni, hagytam hogy várjon, ha pedig nem tudott, akkor átadtam az üzenetet, hogy volt itt valaki, de nem tudott várni és hazament, de majd még jönni fog. Gyakran voltak ilyen feladataim. Ha valaki megtisztulási szertartást kívánt végezni nálunk, elmentem a mesterhez, és akik ráértek (?), azok bejöttek, akik pedig nem, akkor megint ezt is tudattam [a mesterrel]. Hát így éltem.

B: Előfordul olyan, hogy valaki tanul, de mégsem válhat belőle itako?

N: Hár igen, vannak, akiknek több időbe kerül, és vannak, akiknek kevesebbe, de mivel keményen dolgoznak érte, valahogy csak sikerül megkapniuk az engedélyt, hogy itakók legyenek. Úgy gondolom, aki tanul, az képes is lesz rá. Hiszen nekem is sikerült.

(Ezután átmentünk a szomszédos szobába a kotatsu alá, Nakamura pedig folytatta a mesélést itako tanoncként töltött éveiről.)

22:32.29

B: Tudna mesélni az itako-ként töltött mindennapjairól?

N: Először is, amit tanultam, rendesen meg kellett jegyezmem. Minden nap átmentem rajta, és mindennap tanultam [a mesteről]. Amit először tanított, azt másnapig ismételtetem, hogy ne tévesszem el, és amikor reggel ismét elmentem, amikor beléptem térden ülve felmondtam, amit tanultam, és ha rendesen megjegyeztem, átmentem a teszten, [ilyenkor mondta a mester, hogy] ezt jól megjegyezted. Utána megtanított a következőre, így egyenként, másnap amikor mentem, akkor meg azt mondtam fel, átmentem, aztán a következőt, és így, egyesével tanított meg. Mindenfélét, elsőként, régen, az Ebisu című dalt énekeltem, [amiért cserébe] az emberektől kapott ételeket, ami volt mindenféle, rizst, aki fehér rizst adott, az azt, amiket aztán egy erszénybe tettem és hazamentem. Akármit, amit az az ember meg tudott enni, volt, hogy levest adtak, és [ilyenkor volt, hogy megkérdezték], mit szólnál egy kis rizshez mellé. Afféle koldus életmód volt, ilyen formán sok erőfeszítéssel éltem, mivelhogy először mindent meg kellett tanulnom.

B: Voltak valamilyen nehézségei, amikor elkezdte az itako-ságot?

N: Nem különösebben, nem éreztem nehéznek.

N: Régen nem volt akkora jólét, mint manapság, ezért magunknak kellett ennivalóért járkálnunk, sok mindenben keresztülmentünk, és így éltünk. Ahogy most van, a nyolcvanat [éves kort] is túlhaladjuk, mert régen volt. Az én mesterem is, mivel parasztcsaládba született, úgy gondolom, annyira nem volt gondja az étellel, de először [a mester is] így, hogy is mondjam, úgy tanult meg sok mindent, hogy közben [abból élt, amit az emberek adtak neki]. Egy nap csak egyet tanultam, így minden nap, ha tizennégy volt, akkor tizennégy napon keresztül, mentem a mesterhez, és ha nem felejtettem el, másnap a tegnapi tanultakat elismételttem neki, és ha úgy találta, hogy rendben van, csak akkor kezdtük a következőt. Azért régen valóban, nem úgy mint ebben a mostani korban, elég nehéz volt sok minden, ennivalóhoz jutni is. Szóval először is, reggel elmentem, és az Ebisu-t tanította meg elsőként, mivel az a tizennégyes, amikor azt befejeztük, a következő a a kamijosze volt, ami olyan kuchiyose, ahol a kamit hívjuk le, az is a tizennégyes. Azután a „jigokusagashi-t” ami azt jelenti, hogy a hotoke-sant hívjuk, előzetesen, másnapról a ritmus örvényén kuchiyose-t végzünk, és ha ezt helyesen csináljuk, akkor belénk száll a szellem. Az itako az, aki várja, hogy jöjjenek a vendégek, és eleget tesz a kéréseiknek, és ezt jól tudja végezni.

B: Volt olyan, hogy nem jött senki?

N: Olyan valóban nincs, hogy az év 365 napján folyamatosan jöjjön valaki. [Valószínűleg azt akarta mondani, hogy mindenféle vendég és hotoke van, és attól is függ, hogy alkalmas-e nekik, beleértve a hotoke-t is]

B: Olyankor mit csinált, amikor nem volt vendég?

N: Olyankor különösebben nem volt mit tenni, azt csináltam, amihez kedvem volt.

B: Manapság körülbelül hányan jönnek?

N: Ez nincs meghatározva. Van, hogy hosszú évekig jönnek, van, hogy 5-6 évig is, amikor nem jönnek, akkor van, hogy csak nagyjából ketten jönnek [hosszú idő alatt], és így fejeződik

be a nap. Mivel a vendégről van szó, én nem dönthetem el. Ha jönnek, akkor hálás vagyok érte.

B: Mostanság kevesebb vendég van, mint régen?

N: Igen, valóban kevesebben lettek, mint régen.

33:18.27

B: Ha jól tudom részt vett az Osorezan fesztiválon is. Tudna erről mesélni?

N: Az Osorezan-ra 32 éves koromtól 72 éves koromig végig mentem. Akkoriban, Tsugaru-ból is jött 3-4 itako, innen a Nanbu régióból is 3-4-en voltunk. A végére a nyolcból, kilencen lettünk. Ezelőtt harmincvalahány évig kunyhókat állítottunk, meg sátrakat, így reggeltől estig ott voltunk, ha jöttek vendégek, ha nem, mivel ezt volt a munkánk. Egész nap abban a kunyhóban éltünk, ott ebédeltünk, de a reggelit és a vacsorát ott fogyasztottuk, ahol megszálltunk. Délben ettünk csak a sátorban, és ha jött valaki, akkor imádkoztunk.

B: Általában milyen kérésekkel keresték fel?

N: Hogy milyennel, hát aki akart jönni, az jött, megmondta, hogy ezt és ezt az embert szeretné hívni. Ha én itt voltam, egészen arra, álltak sorba, és estére volt hogy vita is lett belőle. Valaki előbb szeretett volna sorra jutni, de hát volt, aki már reggeltől várakozott a sorban, nem szabad csak úgy előre menni, ezt nem megengedhető. Tessék betartani a sorrendet. Néha ilyen is volt.

B: Van valamiféle különbség a mostani és a régebbi kérések között?

N: Akinek kérése van, az jön most is, mint régen. Elvégre, hogy hányan hány hotoke-sant szeretnének hívni, meg van határozva, nemde.

B: Volt olyan, hogy egészségügyi tanácsért jött valaki?

N: Olyan is volt, sőt, még most is van. Ez sem csak régen volt, még most is így van. Aki mindenképpen tanácsot szeretne, az még most is, minden nap eljön.

B: Fogadott tanítványt?

N: Nem, nem jött olyan, aki meg szeretett volna tanulni. Most már, ha nem is lesz valaki itako, valahogy csak meg tud élni.

B: [Braille] könyv sem volt még akkor, ugye?

N: Azt a könyvet az Osaka Egyetem egy tanárától, Nakayama úrtól kaptam, azt mondta, mivel ez az életem munkája, ha szeretnék, tudna nekem rendelni egy ilyen könyvet, ő készítette nekem. Ezelőtt nem volt könyv, vagy bármi ilyesmi [az itako énekekről]. Ha meg akartad tanulni, muszáj volt az eszedbe vésni, sok minden volt, mint például Oshira-sama. Kuchiyose is sokféle van, mert van aki a hotoke-t akarja hívni, megint más egy kamit. [Az itako feladata, hogy] őket mind megidézze, és ehhez meg kell, hogy legyen az ereje ahhoz,

hogy – éneknek nevezzem – vagyis inkább, hogy tudja a módját annak, hogy lehívja őket.
Úgy van, az itako-nak sem könnyű.